



第一五回(9月上旬号) 『ローヤル・ジェリイ』

by 柴田耕太郎

8月は予告なくお休みいただきました。申し訳ありません。
今回は『ローヤル・ジェリイ』の、表現があやしい部分を取りあげます。

ローヤル・ジェリイ

[ストーリー]

アルバート・テイラーは若き養蜂家。子宝に恵まれたばかりだが、その乳飲み児の娘の食が細くて、妻ともどもとても心配している。アルバートの案じた一計で、目出度く娘の食欲を回復させることができた。ローヤル・ジェリイを大量に飲ませたのだ。これで一安心と喜んだのも束の間、よくよく見ると、乳児であるはずの娘は、女王蜂さながらに変身中！？…。

●表現：

She lifted the bottle out of the saucepan of hot water and shook a few drops of milk on to the inside of her wrist, testing for temperature.

彼女はお湯の入っているシチューなべから、壺をとりだすと、二、三滴ミルクをふりだして、手首の内側にかかけ、熱さをみた。

[解説]

「振って中から出す」のが「ふりだす」の意味だから、よさそうな気になるが、これはコロケーション(言葉と言葉の親和性)の問題。「ふりだす」だと、ずいぶん力が加わる感じだし、対象が固形物のようだ。例：瓶から味の素をふりだし…。

修正訳：ミルクをたらして

But the mother said it was a gift given him by God, and even went so far as to compare him with St Francis and the birds.

けれども、母親は、これはこの子が神からもらったさずかりものだといい、彼を聖フラン

シスと小鳥たちにたとえたりまでしたのだった。

[解説]

この compare A with B は、「喩える」より「比較する」のほうがよいだろう。慈愛あふれる人柄から、説教に小鳥までもが集まってきたという、イタリアはアッシジの聖フランチェスコ(名前は現地語読みとする)と小鳥の親密さを、若き養蜂家ロバートと蜂の親密さと比べたのだ。

修正訳：**彼を小鳥に好かれる聖フランチェスコと比べたりもするのだった。**

‘And we just finished the last feed ten minutes ago…’

「それで、十分ほど前に最後のお乳を終わったところだ。…」

[解説]

「最後の」では、もうお乳は永久にあげないみたいだ。「直近の」の意味がはっきりわかるように訳す。

修正訳：**すぐ前のお乳は十分前に終わった。…**

‘It’s curing her, isn’t it?’

‘I’m not so sure about that, now.’

「あの子は元気になったじゃないか、そうだろ？」

「それがもう、何だかあやしい気持ちになってきたわ」

[解説]

「あやしい気持ち」では、気分が危険なほうへ傾くみたいだ。be sure about は、…を確信する。赤ん坊が本当に元気になったのかどうか、わからなくなったといっている。

修正訳：**もう、わからなくなったわ。**

‘Don’t be a fool, Albert! You think it’s *normal* for a child to start putting on weight at this speed?’

「へんなこといわないで、アルバート！こんなに、体重をふやして、それで子供には正常だと思っているの？」

[解説]

主語がねじれている。体重を増やしたのは、子供。「それで」は、前の節を受けにくい。

修正訳：子供がこんなに体重を増やすことが、あっておかしくないって思ってるの？